

春討の歴史 と今日の意義

嵯峨野高校
杉本良雄

'87.4.19

於 社会福祉会館

第35次高校生春討
第1回生徒部・生徒
代表者会議に
おける講演から
1987.5

発行

第35次平和憲法記念「京都
高校生の集い」春季討論集
会主催者団体中央実行委員会

「春討の歴史と今日的意義」

四十九 社福会館

嵯峨野高

杉本 良雄 講演

平和憲法と春討

今日は日曜日です。ボカボカの日になりました。しばらくすると連休になります。楽しみの時期がくるわけですが、実はこの楽しみの時期、日曜日だとか連休だとかを通じて、京都のこの討論集会の準備をやっていく自主的な、自分から参加しているという力で、実は討論集会はずっと続けられてきたと思います。

今年の集会は、第三十五次ということになりました。三十五年続いてきたのですね。

どうですか。君たちのお父さんやお母さんで若い人だったら、この春討に参加した人もいるのじゃないですか。ずいぶん長いこと続いてきました。そして、それが初めは高校生の弁論大会として始まったわけですが、今では京都のすべての高校から集まってくるような、そういうような集会にまで大きく進んできました。三十五次、大きな重みがありますね。こういうふうな重みのある高校生の集会というのは、

全国ないでしょう。京都だけではないでしょうか。

今年は平和憲法四十周年ですが、この春討には一番最初にこの「平和憲法記念」という言葉がついています。少し深く入ってみましょう。

どうだろう。君たちの同じ世代の中で、事故に遭って亡くなったり、病気になるって亡くなったりした、そういうような仲間はいないだろうか。うちの嵯峨野高校は大きな学校です。たくさんの生徒の中には、残念ながら病気に侵されたりする生徒もいます。

二年前、クラスを中心だった人が、文化祭の前に交通事故に遭った。クラスの仲間がものすごく心配する中で、しばらく命は続いたのですけれども、とうとう亡くなってしまった。

僕もそのクラスを授業ですっと行っていたのだけれど、最初の授業の時は、授業なんかできないね。きのうまで一生懸命準備していた仲間が急にポツツいなくなっちゃって、そこだけの席が空いてしまっちゃったんだ。授業の中でもみんなが泣いて授業が進められなかった。一人の人間の命というのは大事です。お母さんもお父さんも見ていられない程悲しんでいた。葬式の時には、ちっちゃな路地のところだったけど、もう嵯峨野高校の生徒であふれてしまった。いっぱいになっていた。

恐らく、あの時のクラスの仲間は、あの時のことを忘れないでそのまま覚えていてと思う。

今まで生きてきて良かったなということはあるだろう、彼には。でも、十六歳の時に亡くなった彼を思うと、もっと生きたかったという彼の切実な気持ち、痛いほど響いてくるような気がします。

僕は、若い君たちの健康とか命を本当に大事にしてほしいと思う。こ

のことが、実は平和憲法ができる前は一番粗末に扱われて、どの学校にも、どの地域にも命を失っていた青年がいたわけです。

実は最近、僕はある先生が調べていたのを縁として大分わかったことがあった。すぐ近くの人のことだったので僕はびっくりした。それは、実はこういうような事実だった。

昭和十九年、北桑の地域で京北町・美山町で十四・五歳の若者たちが集められた。「どうだ、お国の為に尽くせ尽くせ。満州のあの北の方に開拓団として、義勇団として参加しないか。行けよ」と校長や、先生に声を掛けられた。そして、ぞくぞくと若者たちは集まったのです。全国で八万三千人もいました。そして、昭和二十年五月、彼らは満州の北、北満と言うけどね、すぐ隣はロシアなんだけれども、そこで彼らは開拓をはじめた。軍隊の練習もあった。ところが、日本は敗戦間近か。彼らは希望に燃えて行ったのだけれども、すぐその地域で追われる身になった。何千人も集められた仲間たちが、もう大急ぎで知らない土地を南の方に下っていった。山の中に逃げる。食べ物がない。山の中でどうも日本は負けたいらしいということを知ってしまうのですね。そして武器を捨てて彼らは投降する。捕虜に入ってしまったのですね。その時の手記がある。北桑田の人が生きていらしかった。その人が捕まった時の感想を少しだけ読みますから聴いてみてください。

「監獄の夜はさらに辛かった。全員七百名余り、二棟の元囚人が働かされたであろう製糸工場の大広間に寝かされた。古い麻袋を布団代わりにした。零下十数度の夜、ボロボロの夏服のまま麻袋を被ってでは寒くて眠れない。うつらうつらとしては目が覚める。夜が明けると横に寝ていた仲間が、口びるが黒く冷たくなり動かなくなっていた。息

が絶えて二、三時間もすると硬く棒のようになる。

小学校の先生から少年義勇隊に行くように教えられた時、生まれ故郷の親兄弟と別れる時、小さな胸に不安ながらも希望を抱いて京都をあとにした時、誰がこのような最後を遂げると思っていただろうか。

彼は、どんどん死んでいく仲間を目の前にして、自分も死ぬ。絶対にもうここで死ぬというふうに思った。「思い詰めた道は一つしかなかった。しかし失敗すればそれこそ最後、殺される。最も信頼できる仲間をつくることだ。朝のうちに井口君に秘かに話した。」井口君というのはやっぱり北桑田から行った仲間なんですね。「おれも脱走する。ここに居れば必ず死ぬ。収容所を破って逃げるか死ぬかだ。おれたちには他の手段はない。」

その収容所は五メートルぐらいの高さの塀があるのですね。とても逃げられない。窓は十五センチぐらいの幅で鉄棒がある。ところが、かつてはこれは日本の人がつくった収容所だったのだけど、一カ所鉄棒が折り曲げられてやっと通れるような穴があったのですね。彼と井口君はそこから抜け出して、夜、全く知らない土地を南の方に向かって、逃げて行く。氷の上を、雪の中を走って。「遠い故郷の母の顔、姉の顔、弟の顔が臉に浮かんで消え、消えては浮かんだ。その凍って死んでいた友の惨状が、雪の中に埋めた、変形した非常に苦しい顔、顔、顔が、僕の頭上に重くせつなく浮かんで乱れた。生き抜くのだ。どんなことがあっても生き帰り、このことをみんなに告発するのだと、未明の冷え切った風雪の中を、込み上げる涙を押さえながらほのかに薄く明るさをおびた方向に向かって、一足一足進んだ」。残った人たちは寒さ、栄養失調、赤痢などで続々と死んでいきました。ちょっと長い

話になったね。

これはあの戦争の中のたった一つの話です。こんなふうな場面があったら、こっちにもこっちにもあったのですね。そして、日本には世界最大の悲劇の一つがあったね。広島。長崎。

この時の教訓を、「どんなことがあっても間違ひなくしつかりと永久に生かしていこう」という決意のもとにいまの憲法がつくられてきたのだと思うのですね。高校生たちが、自分たちの世代の人たちがこんな目に遭った、間違ひなくこの教訓を生かさねばならないということ、でこの平和憲法記念というのは付けられてきたというように思うのです。

初めの弁論大会の日がまさにそうでした。この平和憲法はつくられたけど心配な動きがあるというので、あの弁論大会から始まったわけです。

仲間を知る中で自分を鍛える

「京都高校生の集い」

次に、「京都高校生の集い」というのを見てください。非常に単純に書いてありますけれど、結構幅広い意味がありますよね。自分の学校に行くとその学校のこととはよく見えます。しかし、他の学校はなかなかどんなのかというのはわからないところもあります。全日制の高校があるよ。定時制の高校があるよ。この定時制の高校は、昼間勤めて夜学校に行く定時制もあれば昼間学ぶ、昼間定時制もある。そして通信制の高校があるね。障害児学校もあります。また他の面から見ると公立高校があるよ。でも公立高校は京都の府立の場合もあるし、京都

市が立てた市立の高校もあるよね。私立、京都は非常に多いです。三十数校ありますね。その他に普通科そして職業科というのもあるね。

「京都高校生の集い」というのは、こういう仲間の人たちが、みんなが集まってきてつくっている集会なんですね。かつて、こういう事がありました。毎年、新聞記者がみえます。新聞記者が来てインタビューしたのです。そして生徒の代表の人に、「この集会って何ですか」と尋ねたら、ちようどお昼休み、みんながフォークダンスをしているところ。「京都高校生の集いはこれだ」と彼は言ったのですね。でも、見てみるとそこが面白いね。本当に僕は彼はよく見ていたと思う。その中には郡部の人もいれば市内の人もいる。全日制の人もいれば定時制の人もある。障害者校の生徒も一緒に踊っていた。「高校生の集い」というけれどこんなに幅広い高校生の集い。他の仲間を知る中で自分を鍛える、この精神はいつまでも生きて行くでしょう。

あと「春季討論集会」というのがあります。資料の年表を見てください。第一回目から四回目までが、「憲法擁護高校生弁論大会」とあるでしょう。それから五回目から憲法記念高校生討論集会とあるね。この時からどんどん、どんどん参加者が多くなっていくわけですけれども、十一回目を見てもらえ。三十八年六月三十日、綾部高校で行われたわけね。ところが、十一月二十四日鴨沂高校と書いてあるね。秋にもこの討論集会をやっていたわけですね。二十二回目を見てもらえ。二十二回目は四十九年六月十六日山城、嵯峨野、紫野高校とあるけれど、その前に、「第三回京都高校生文化交流祭典」というのがあるね。文化を交流しようというので討論集会の代わりに文化の交流が行われたというふうな取り組みがあったわけですね。だから、春季討論集会とい

う名前が残っているわけですね。大急ぎで歴史の面から見てみました。

歴史の中で培われてきたものということなんですけれども、交流と連帯とあります。交流と言うと、そんなに深さは感じないような言葉だけれど大事だね。連帯が交流の中で生まれてくると思います。もう一度、資料を見てほしいのだけれども、一枚目の第七回、その備考のところを見てもらえ。「定時制差別」と書いてあるね。こういうことが交流の中で話された。一体何のことやろ？、どのような学校でも高校を出たらみんな等しい同じ高校卒業の権利をもつよな。な、当然よね。でも、実際には、この問題は深刻だった。高校を卒業する、就職する。全日制と定時制との間に差別が歴然と存在していた。求人条件に「定時制を除く」という企業がたくさんあった。「おれたち昼間働いて夜勉強している。確かに困難な状況の中だ。でも四年間頑張って自分たちがやっているこの勉強が、同じように正當に扱われないとはおかしい」という意志表明が、定時制の仲間から堂々とされたわけですね。そしてそれは全日制の仲間にも大きな感銘と感動を呼んだ。先生にもその内容は響いた。こういう交流の中で、京都の高校ではどんなふうな高校に行こうとも、学ぶ内容の一番大事なところは、みんな一緒にしようという精神が貫かれてきているのですね。これは、いまでは当り前と思っているかも知れないけれども、しかしそうではない。定時制の仲間の大きな奮闘があったからこそ、当り前になってきたのですね。いまでも手を抜いたら、いつでもそうした差別が横行する可能性があるからね。

定時制の生徒諸君は昼間働いて仕事が終わるとすぐ学校に行く。ごはんを食べる暇がない。学校で給食の準備してほしいという、そういう

ふうな要求もこういう中で実現していったのですね。いま食べているあの給食はそういうところから出てきているわけですね。

次に十七回を見てください。安保沖縄問題。備考のところに、沖縄高校生参加数年続くと書いてありますね。沖縄が米軍の占領下にあつて本土との渡航も自由にならない。たくさんいろいろな問題はあつたけれど、なかなかその生の声は知らされない。でも国民の中でもいろいろな運動があつた。京都の高校生は、是非ともその内容が聞きたいというので、先生方の援助をも受けながらカンパ活動をして、沖縄から高校生を呼んで報告を受けたことがあつたのですね。沖縄はどんな状況なのか、その時に高校生の自分たちはどんなふうに思っているのか、生の声を本土の仲間にも伝えられるというので、本当に喜んでいましたよ。自分で本当に言いたい内容をもっている沖縄高校生、その姿勢には京都の高校生もびっくりしたね。自分たちの住んでいる町の状況。どのくらい基地があるのか、どんなふうな制限があるのか、どんなふうな事故に遭ったことがあるのか、本当に立派に報告しておりましたね。伝えたいものがある、絶対に訴えたいものがあるという時には、あんなに立派に報告できるのだからかというふうに思われた内容でした。先輩たちから聞いたことがあるかも知れないですね。

もう少しどんと時代をこちらの方に上りましょう。交流と要求というところについてです。ここはもうそんなに以前ではないです。」

京都の中央、市内の私立高校、女子高校です、の生徒が特別報告をした。いまだどうだろう。私立高校に行っていると初めの新年度の納入金は大体平均して六十万円台にっていますね。大変ですね。その中で家の人がどんなふうにお金を下面して自分たちのためにやってくれ

ているかという報告をしてくれたのですね。

その問題を女子の高校生が、自分の体験を通して伝えてくれました。その内容は感動的で公立高校の生徒にも非常に深い理解を広げてくれました。そんなふうにして通っている仲間もいるのか。じゃ、自分が出たといふ公立に行っている場合、自分たちはもっと頑張らなくていいかといふかんというふうな気持ちにかられたと思います。

北桑田の生徒が、こんなふうな特別報告をしました。バスで通う仲間が多かったのです。バス代の値上りで、ひと月の通学のバスの定期代が一万三千円を超えるような者もでてきたのです。兄弟で通っていたら二万六千円もかかる。大変なんやというので、特別報告をされました。そしたら、今日もみえてますけれども、とたんに北桑田高校の生徒会に、その運動に自分たちも連帯するという連絡がありました。で、高校生のいくつかの生徒会が連絡を取り合って、そのようなことにについて調べたこともありました。ある所では地域への署名等が行われた。教職員関係は、組合の先生をはじめとして、「これは大変だ」というので、バス通学問題のことに運動が広まりました。育友会の人も立ち上がりました。それで、その特別報告があった一年間ぐらいの間に、府県レベルでは京都が全国で初めて、「通学にお金がたくさんかかる場合には、ほんの一部だけれど補助しよう」という制度が創られたのです。これは本当に少ない金額でした。でも自分たちでやったらずいしょでもそこが明るくなってくるという意味では、非常にみんなに勇気を与えた報告だったというふうに思います。

次、交流と自我の確立というところです。

これはごく最近の話です。京都市内の公立高校でした。討論集会に

ついて、実は生徒にアンケートをとった。そしたら、「討論なんかあまりしたくない。生徒会で討論集会しなくてもいいんじゃないか」というものたくさん出た。そして、「うちの生徒会はやらない」ということにした。第一回目の生徒部、生徒代表者会議でそのことが出ました。そしたら、他の学校からも、「そうなんや、分科会をつくって一生懸命準備するのだけれど、ほんまに発言するのは、当てられてやっと発言が出たり、あとで指名してください」とか「考えてます」なんていう発言が多い、というのがどんどん率直に出てきた。

しんどかったよね。討論集会というところ、今でも一面そういうところがあると思います。嵯峨野高校でもそうです。頑張らね、生徒会執行部がやってくれました。しかし、なかなか討論がうまくいかなかった。難しいです。

ところが、その時のここの会場の中で、一人の生徒が立って「自分は亀岡の方に住んでいた。そのまま高校に行こうと思っていた。どうしても学校に足が向きにくくなって、自分は大きな挫折感をもった。で、市内の定時制の方に来た。実は去年から高校生の討論集会に参加してきたんや。人は僕のことを登校拒否と言うかも知れんけど、僕はほんまに自分が行く道を見つけたのは、この討論集会の中だった。アンケートとったらそういうふうなことが出るかも知れないけれど、なくさないでほしい。」彼はこの集会の独特の雰囲気を知っていたと思う。学校では討論はなかなかうまくいかないけれど、たくさん学校から集った京都のこのレベルでやってこらん。ものすごく発言が積極的に出てくる。クラスで行事をしようと思うけれど、フォークダンスしようとしても、なかなか輪ができてくれないよね。やったら楽しいのだけど、

みんな喜ぶのだけど、できないね。できているところは、僕は胸を張って欲しいと思う。それだけ交流と連帯が学校の中に位置付いていると思う。嵯峨野高校でもうまくいったら文化祭とか体育祭のあとには大きな輪ができるのです。普通の時にはやっぱりなかなかできないのです。

で、実は彼はそういうふうな中で、「自分はいいい友達ができた」と、「学校を超えた友達までできた。是非ともつぶさないで。どの学校でも同じような僕みたいな子がいるのと違う？」というふうに彼は訴えたのです。大分しんどい生徒の代表者会議でした。でもね、彼のその訴えはみんなの心に響いたのです。最後には、「よし、今年もやっていこう。確かにうちの学校にも同じような仲間がいる」というので伝えていきました。今でも同じような状況があるのではないかというふうに思うのです。

もう一つ、自我の確立のことです。

あとで説明されると思いますが、中央の実行委員会がつくられますよね。それぞれの地域代表が集まりますね。そしていろんな学校の代表者も集まりますね。定時制高校の代表者、あるいは障害児学校の代表者、部落研連の代表者。その中で障害児学校からも毎年代表者が来ます。この年には、丹波養護学校から代表者が来ました。彼は足に障害があつてなかなか階段等の昇り降りが大変だったのです。実行委員会が三階にあつたので、会場まで着いても昇り降り大変だったのです。一生懸命頑張つて、そしてまた仲間と会って話したいというので、彼はいつも間違ひなく参加しました。彼は言葉もなかなか出ないのです。自分の話したいことを非常に頑張つて言う。しかしな

かなかその声が出てこないのです。でもね、その努力の中で言う言葉は、自分で一番言いたい言葉なんです。ほんの少しの言葉なんです。が、実に深く重みがあつた。それで討論はものすごく深まりました。国際障害者年の時です。あの時の資料は、彼は話をするにはできないけれど、文では書けるというので、彼がみんなの討論をまとめてつくった資料なんです。僕は記念すべき資料だと思つていいます。

彼は、いまもそういうような大変なハンディをもっている。でもね、実に遠い将来まで見通していますよ。自分が学校を卒業した時、どこに就職できるのだろうか、どうしていいのかわかることを考へて、そしてその状況をみんなの討論の中で聴いた内容をまとめ、自分で勉強したのをまとめて資料にしました。

あの時に参加していた仲間、その資料が配られた分科会の仲間は、大事な内容を自分のものにしたのではないだろうか。自分をつくり上げたのではないだろうか。僕はこの「自我の確立」というのは、交流の深いところで育まれていく、そんなふうに思います。

歴史の中で培われてきたものということだったので、いろいろあつたと思うのですが、僕の感じでは、その底流にみんなが自分のいまの状況を率直に言ったり、自分の願いを言ったり、自分の意見を言ったりして、そして相手にわかつてもらえる。いろいろな内容を広めてきた。そういう中から、大きな連帯が生まれたり、要求の実現が生まれたり、自分自身をつくり上げるといふうのがつくられてきたのではないだろうか。

あえて言えば、そういう土台の上につくられるのが本物の大事な民主主義じゃないだろうか。多数決、大事です。でも、こういう内容

のないところで、もし多数決が横行したら民主主義は生きてはいけな
いですね。

春討の今日的意義と課題

それじゃ一番最後のまとめの段階の方に行きたいと思います。

「今日的意義と課題」と書きました。いまそれぞれの学校はどうで
すか。新入生も入ってきました。学校の中を思い浮かべてください。ど
の学校でもクラブ活動がある。生き生きしているね。今日、僕も学校
へ寄ってきたけど、日曜日でも集まってきてクラブ活動をやっている
ね。非常に活気に満ちています。勉強の方も新しくスタートして、決
意に、いまの段階は燃えています。しばらくするとその決意も歪んだ
りするかも知れませんが、全体としては非常に皆明るく過
しているというふうに思えます。しかし、同時に見逃してはならない大
事な傾向もないでしょうか。

少し極端な例だけれどもしかし、僕はこの傾向はどの学校でもある
と思うのですね。ちょっとだけ紹介させてください。こういうこと
でした。新聞報道としても大分ショッキングだったので、みんなも記憶
にあると思う。

東京世田谷区、おばあちゃんを殺し、そして自分も自殺を図った高
校生。彼は四十ページも自分のその時の気持ちだとか動機だとかいう
のをノートに書いていたのですね。だからなお、その時のことがみん
なで紹介されました。

「おじいちゃんのようになる」という目的、大学教授の祖父、同じ

く大学教授の父、だからエリートになることを唯一の目的に育ったん
だね。学校に行っても友達がほんまいないんだよね。自分の周りにい
る友達がみんな、いやらしい劣等生に見えてくる。彼は祖母を殺して
家財道具を焼き捨てて、街頭に出て金槌で手当たり次第に劣等生や大
衆に襲いかかる、そしてみんなに不愉快な思いをさせるために自殺す
る、という計画を彼は作っていました。

この少年ね、——けれども、彼が非常に共鳴していた仲間がいた。
それは、東京の開成高校の生徒。彼の事件の一年前、家庭内暴力の極
みに達した開成高校三年生を父親が絞殺し、その後を追って母親が自
殺するという事件でした。

この高校生たちにとって勉強って一体何だったのだろう。僕は、い
まの高校、非常に明るく活気に満ちてるけれども、同時に今のこの社
会の歪み、これは大人の責任なんでしょうけれどもね、いい大学に入
ったらいとところに就職できるということが、たとえば最優先され
りしていて、あるいはそういうふうな傾向が、全体ではないけれど、学
校の中に一部でもあったりする、というふうな傾向は感じられないだ
ろうか。

逆の場合だと、絶望してしまって、もう大体自分はこういうものだ
というふうな形で、まだ自分が本当に自分の力を試し切っていないの
に、勉強も思い切ってやっていないのに、クラブ関係でもなかなか出
てくることができなかったり、あるいは友達と本当に楽しい経験とか
がないまま、こんなものだろうというふうな形で、いわばあきらめの
なそういうふうな傾向も一面ないだろうか。「知の力」が自分や仲間の
幸せに結びつく、自分や仲間にはもっともっと可能性がある、という

う信頼が希薄になってきているように思う。こういう傾向というのは、全体ではないけれど、やっぱりみんなの力で何とかしたいね。そういう事を思うと、いままでこの高校生の討論集会の中で培われてきたものの中で、僕はいくつか最後の意義と課題で訴えておきたいことがあります。

「交流の中の喜びの実感」と書いています。

歌声。最後あるいは最初、歌声等が行われますね。恐らく今年もされるでしょうね。全体集会ではね。あの時にみんなと一緒に拍手をしながら、フォークソングを歌ったり、汗を流してフォークダンスしたりする。ああいう喜びを僕は是非とも実感してほしいというふうに思っています。こういうのをつくり上げられるのは、いま一番大事な土台になっているのはこの集会だというふうに思っています。この経験は各学校に是非とも帰りたい。学校でもつくりたい経験だというふうに思います。

二つ目。参加した生徒からアンケートを見ます。みんなが昨年も見ただしょうね。どうですか？その中で感動した人たちのアンケートをね、いろいろの学校の生徒が来ている中で、手を挙げて自分から発言するという感動が非常によくあったでしょう。あったでしょう？そうなんです。自分の意見だとか要求をたくさん人の前でもって発言する。大事ですね。この伝統は是非とも生かしていきたいと思えます。おしゃべりはどこでもある。しかしみんなの前でこれは言いたい。このことは言う価値があると思っていることを言うことというのはなかなか難しいですね。しかし、ここの集会ではみんなが手を挙げて発言するから自分も発言できるという、そういうふうな雰囲気がつくられ

てきていますね。

三つ目。「仲間への信頼と大胆な夢」

学校に帰るとHRでピラを配ったりして春闘に参加を呼びかけます。でも、なかなか積極的に働き掛けるのも難しいね。クラスであの子にもこの子にも呼び掛けて「一緒にいこう」という働き掛けは、なかなか難しいね。しかし、あの経験をしていたら、他の人にもやっぱり大胆に言って働き掛けてあげようよ。一人でもたくさんの人に参加してもらおうようにしようよ。あの経験を自分だけにしておくのはもったいないだろう。他の人たちにも広げていきたいと思えます。その時に、「討論なんて」というふうに相手は思うだろうな、という気持ちがある。しかし、逆に言えば、そこは相手に対するやっぱり信頼をもっと深めてもいいのではないか。いいものだったらみんなやっぱり感動すると思うよ、間違いない。だから、大胆に呼び掛けよう。その問題は、僕は信頼が土台になるというふうに思っています。

全国の注目と書いてあります。京都で始まったわけですけども、高知、岡山、埼玉等でもつくられるようになりました。全国の注目になっている集会ですから今年もまたいくつかの県もみえるでしょう。私たちそれに誇りをもって参加したいですね。

最後です。

たくさん仲間を参加させて、いい内容をつくっていくというのが、この討論集会を守っていく土台だというふうに思えます。集会をたくさんの人が理解してくれている。君たちの先輩、たくさんの人たちがこの集会に参加してきた。その人たちがいま地域で働いたり、職場で働いたりしている。たくさんの人たちがこの集会を見てくれると

いうふうに思います。

しかし、この討論集会というのは、実は高校生はクラブ等の交流はいいけれど、生徒会同士の交流は、これはさせないようにしようというのが全国的な動きなんです。二校間以上の生徒会の交流禁止というのは厳しく禁止されている府県もたくさんあります。

ですから、この京都の高校生の集会は、僕はいつ何時そういうふうなことがあるかも知れないと思う。でも、去年のあの集会の内容を今日の交流の中で深めてください。どういうふうなものだったか。そして、今年どんなふうなものにつくろうかという準備をしていただきたいと思います。

この取り組みは京都のみんなの大事なものであるけれども、それだけじゃなくて、僕は全国でもかけ替えのないものだというふうに思っています。もし、こういうふうなのがなくなってしまうたら、それは全国で目指していく高校生の集いがなかなか見えにくくなってしまいます。教職員の方もいろんなところで援助をしながらいききたいと思っていますけれども、集会の主人公は君たちです。高校生活の主人公は君たちです。しかも、この高校時代というのは人生の中でも一番敏感で繊細で伸びる時代です。この集会の中でどんなものがつくり上げられるか。自分がどんなふうな喜びを実感できるか。共に頑張りましょう。